

人間らしい働き方、納得のいく仕事

増田 一世

「ゆっくり働く」—スローワークをテーマにした本がある。（『スローな働き方と出会い』岩波書店、2004）著者は田中夏子さんと杉村和美さんのお2人だ。この本の「はじめに」に、「職場が淘汰されかねない危機意識の中で、これまでのような『市場での生き残り』といった発想とは異なるやり方で、仕事に対する展望を切り開いていきたいと願っているのではないか」と著者らの思いを述べている件があるが、まさに私の思いと重なる。この本では、現代社会の「働くこと」をめぐる「生きにくさ」を指摘し、そこからの脱出の糸口を「スローワーク」というキーワードに求めようとしている。「スローワーク」という言葉は、ひきこもりや大学不登校の若者が再び社会と関わることを支援するためのNPO法人ニュースタートの二神能基代表が、新しい働き方の仕組みを作る上でのキーワードとして提案したものだ。

私は、やどかり情報館という精神障害を体験した人たちが働く福祉工場を仲間とともに立ち上げ、統合失調症などの慢性疾患を持つ人たちが健康を守って働くためのルールに基づき、職場を作ってきた。これは、仕事に人間を合わせるのではなく、人間に合わせた仕事づくりへの努力であった。精神障害を持つ人たちの中には、働いて、働いて、過労や長期にわたる睡眠不足などを経て、発症してきた人も多く、そうではない働き方を模索してきたのだ。しかし、一方で福祉工場は最低賃金以上を保証する事業所なので、生産性も重視しなくてはならない。その人に合わせた働き方を作りながら、なおかつ生産性を上げる

という一見矛盾した目的を果たすためにどのように事業を進めていったらよいかという課題がある。

この本の中で本来の効率性の意味を次のように述べている。「『効率的な』(efficient)という言葉は、『腕の立つ』『能力を発揮した』という意味を併せ持ち、原義をたどれば『(仕事=operaの)成就』から派生しています。(略)私たちが通常理解している『効率的』という言葉の意味は、『単位時間あたりの仕事量を最大限にする』といったことです。それは『腕利き』の1つの要素であっても、すべてではありません。(略)『効率的な仕事』とは、携わる人々が工夫を盛り込みながら、自分たちの成長を確認しつつ目的にむかって所作を積み重ねていくこと、ということになります」

私たちは「単位時間あたりの能率」だけを求めるのではなく、「腕の立つ」人になることを目指してきた。どんな仕事においても、その道のプロフェッショナルを目指そうと、互いに努力してきた。そのためには情報を共有することを重視し、さまざまな企画を練り上げるためには議論を重ね、必要な学習の機会を保障してきた。こうした営みを重ねて、やどかり情報館という職場を作り出してきたのだともいえる。

著者らが「スローワーク」にこめた思いは、共感するところである。「人間らしい働き方」「納得のいく仕事」を実現していくこと、障害や疾病の有無に関わらず、私たちの大きな願いなのだ。